

ヤスクニ・レポ 196

戦後71年にあって、私たちの責任課題を考える

代表 西川重則

1

2016年1月11日の「朝日新聞」の朝刊の第1頁によれば、「首相、改憲派『3分の2を』」と大きな見出しで書かれている。その解説の一部を記せば次の通りである。

「安倍晋三首相は10日のNHKの報道番組で、夏の参院選について『自公だけではなく、改憲を考えている責任感の強い人たちと、3分の2を構成していきたい』と述べた。自民、公明両党のほか、おおさか維新の会など憲法改正に積極的な政党を合わせて、憲法改正の発議に必要な3分の2の議席確保をめざす考えを示したものだ」。

以上は、現在通常国会が開かれており、私自身は1月4日の開始の日から休むことなく国会傍聴を続けており、首相の発言は何度も直接聞いているが、マスコミ報道の第一面に類似の発言が報道されることを考えると、通常国会の閉会(6月1日)後に予定されている参院選挙の厳しさを改めて痛感させられ、私たちの課題を真剣に考えざるを得ない。

しかし、戦後71年の年の始めに、憲法改正(改悪)反対、戦争絶対反対を主張すればするほど、私たちにとってただ言葉で反対の立場を述べるだけではほとんど無意味であることに気づかされている私は、改めて責任ある主権者・有権者として、理論面および運動面においてどうあるべきかを真剣に考え、共に学び合い、共に信仰者にふさわしく戦うために冷静かつ具体的に責任ある発言、行動を示さねばならないと思っている。

したがって、戦後70年だけでなく、戦前・戦中・戦後を総括しながら今年の緊急課題を直視しつつ、私の願いを述べて見たい。私の場合、今年の<2・11>関連集会のために、金沢に招かれており、<2・11>の日にKGGKの集会から、12日、13日、14日の主の日の礼拝、午後の集会と続きます。そして東京に帰って、二月の下旬に東京での関連の集会が予定されている。

私の場合、国会傍聴(今年で17年目)の体験を通して、多くの方々とは違っているが、「戦争は国会から始まる」という私の体験から具体的な国会の歴史を通して「はだかの国会」を正確に知り、なぜ戦争と国会との深い関係が見られるのかを報告し、今後の国会のあり方を日本国憲法の徹底学習によって解説することが必要だと思っている。たとえばKGGKでの講演のタイトルは、「アジアの視点に立って、わたしたちの責任課題を考え学び合う」としたが、それはお分かりの通り「アジアの視点に立って」歴史の事実に基づく歴史の認識を共有することがまず私たちの責任課題の始まりであるからです。

言うまでもありませんが、たとえば、韓国、中国、ハワイだけでなくアメリカの北部、南部などについて直接ひとり旅あるいは親しい方々との旅行によって学び合った私の体験から見てきたことは、右に述べたようなタイトル「アジアの視点に立って」歴史認識を共有することが重要な方法であることから、ひとり旅あるいは複数での旅路を経験することの意味を講演の時訴えることの大切さを知ってもらいたいと思っている。

2

私たちにとって、貴重な書物の学びと共に、実際に韓国、中国、アメリカその他の国に行き、その国の市民と親しくなり、直接話し合っただけでその国、その地域について正確に知ると共に、直接一般の市民と話し合っただけでさまざまなことを学び、認識を共有することの大切さは、私たち日本人にとって想像以上に有意義な体験となるでしょう。たとえば、北京大学で、私は日本の有事法制をめぐる問題と靖国神社問題との深い関係を講演で話した時、多くの地域から聞きこられた教授たちだけでなく、優秀な大学生たちが夜を徹してでも聞きたいと言われたほどだったが、その前提は私自身が日本の侵略・加害の歴史を率直に認め、謝罪の思いが理解されたことから

だったと思っている。北京大学の学生がいかにか優秀かという事例のひとつは、いわゆる 1919 年 5 月 4 日に中国で初めて日本に対する「抗日」という言葉を産み出した大学生であったこと、そして戦後の今も「抗日」という言葉が中国で用いられていることは周知の事実となっている。

別の地域でも、私が初めて中国の人々と話した時、私がどんなに日本の戦没者遺族のひとりとして加害者の戦没者遺族であることを自認して何度謝罪しても、被害者の立場から、「憎い日本人」として厳しく批判されたものだった。しかし、何度憎まれても毎年出かけて心から謝罪の思いを述べる私に対して、遂に私の心からの謝罪の思いが理解され、何と空港まで来られて待って下さるようになったことを私は忘れることができない。

私が講演のタイトルに、とくに若い世代の K G K の方々に対する講演の時、「アジアの視点に立って」とし、具体例を挙げて、今後若い世代の日本人が戦争体験がなくても、日本の侵略・加害の歴史の事実に基づく認識の共有を心に刻んで欲しいものである。

そして具体的にアジアの国々との関係をよりよい関係に取り戻して欲しいと心から願っていることを強調しておきたい。

最後に、安倍首相及び閣僚の問題点について述べ

る意味を考えて欲しい。国会の答弁について述べる必要がないほど、レベルの低さは改めて報告する必要もない。自民党の女性議員や男性の議員が、天皇制について述べ、皇紀 2600 年云々と言った類似の発言を誇らしげに言い放つ状態である。民間の宗教法人である特定の神社・靖国神社に揃って参拝する閣僚や議員がいること、安倍首相が 1 月 5 日の午後伊勢神宮に閣僚と一緒に参拝したり、憲法違反を公然とくり返すことも周知の事実となっている。

私の考えを率直に言えば、そうした現象は一言で言えば、日本国憲法に学ぶことのない首相、閣僚、国会議員であるということである。より具体的に言えば、普遍的価値を持っている日本国憲法に習熟していない公務員であるということである。同じ自民党選出の田中角栄首相が 1972 年 9 月 29 日に、日中共同声明に調印した時、戦争の反省として、「日本側は、過去において日本国が戦争を通じて中国国民に重大な損害を与えたことについての責任を痛感し、深く反省する」との声明を公に表明した歴史の事実を安倍首相も閣僚も国会議員も学ぶこともないままに、参院選挙の準備や憲法改正（改悪）に狂奔しているのではないだろうか。憲法改正（改悪）を当然視する安倍内閣の退陣を求め、私たちの責任課題を確認して終りたい（2016・1・11）。

2015年12月18日例会奨励 マタイの福音書1章1節「イエス・キリストを信じる信仰」 日本同盟基督教団馬込沢キリスト教会 山本進牧師

イエス・キリストが人となれて、この世に来られたのは、私たちの救いのためでした。

さて、旧約聖書と新約聖書の架け橋はマタイ 1 章 1 節の「アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図」です。それで旧約聖書で代表的な人物は、イエス・キリストとの繋がりという視点で、アブラハムとダビデです。アブラハムの信仰（創世記 15：6）はただ単純に主を信じ、主が言われたことが必ず、そのとおりになると信じて受け入れた信仰でした。高齢のアブラハムとサラから子が生まれ、その子孫が星の数ほどになるという主のみことば。アブラハムやサラのからだは死んだも同然であることを理解しながらも、彼の心では信仰が弱ることなく、反対に強くなって、神には約束されたことを成就する力があることを考えとは別に心でしっかり受け止めることができたのです。パウロはアブラハムの信仰から信仰義認という神から与えられる義で、信じる全ての人が神によって義人とされることを悟ったのでした。（ローマ 4 章）

一方、犯してしまった罪に対しては、神の御前に

心からの告白があり、神に赦しを願うなら、赦されるのです。これはダビデを通して示され、さらにイエス・キリストの十字架によってはっきり示され、私たちの救いになりました。罪を犯した者に対する前の契約は有効か？それは有効です。しかしながら、神様に赦されたからといって、地上では原因結果の関係のため、罪の結果は残ります。でも裁かれてもよいのです。その罪が主に告白されたものなら、死後の世界には持ち越されません。

ダビデは悟りました。主は私たちを赦そうとしておられる。私たちはただ主にお話し、主に対して自分の罪を認めればよい。そのことで主は私たちの咎を赦してください。（詩篇 32：1, 2）それで、ダビデを通して現された信仰は、霊的には神は私たちを赦そうとしておられる。それゆえ私たちが神の御前に自らの罪を認め、悔い改めることで魂が救われる、という信仰です。その信仰対象はイエス・キリストです。たましいに平安を与えられましょう。